
セプテンバー・レター <伝説のブッチャー・ブルー>

アメメン

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セブテンバー・レター <伝説のブッキー・ブルー>

【Zコード】

Z2936C

【作者名】 アメメン

【あらすじ】

父犬を訪ねる為に家出をしたブッキー・ブルーといつ名の犬の飼い主が、30年も経ったある日、その消息を知らせる手紙を受け取る。

その手紙が届いたのは、9月に入つて3度目の日曜日の朝だった。昨夜の親父との諍いのせいで・・いや、昨晚だけじゃない。

僕は親父と理解し合えた事など一度も無い。

いつもの事だつたけれども、ムシャクシャしていたから朝寝坊を決め込んでいた。

「パパに変な手紙が来たよ。」と、末の娘が手紙を持って來た。

手紙を裏返したが、差出人の名には心当たりが無かつた。

住所は北海道となつてゐる。僕は北海道には行つた事も無い。

でも宛名の所番地には間違ひは無いし、何より宛名の欄に書かれた『ブッチー・ブルーの飼い主』というのは僕の事だ。

僕が、ブッチー・ブルーと名付けたその犬と暮らしたのは、わずか2年だけ・・それも、30年ぐらいも昔の事。

あの頃、十歳だつた僕も、今では3人の子供の父親になつてゐる。

なんだか不思議な気持ちがした。

机の上に置いて暫く眺めていたが、思い切つて封を切る。

中から転がり出て來たのは、古い木のメダルと、一枚の古ぼけた写真だつた。

なんとも懐かしい匂いのするメダルをそつと手に取る。

それはまぎれも無く、昔、年賀状の版画板を削つて親父が作ったブッチーの鑑札代わりのメダルだつた。

表面に「ブッチー・ブルー」とカタカナで文字を彫り、ニスで塗り固めた簡単なモノ。

それでも、裏面の細かい住所の文字を入れるのに、親父が一苦労してゐた事を思い出した。

「パパ・・どうしたの？」

娘が、心配そうに私の顔を覗き込む。

「いや・・何でないさ・・」

僕は、ごまかし笑いをしながら写真に目を移した。

色の褪せたカラー写真には、2匹の犬が映っている。片方の目の周りだけが黒く、まるで殴られたボクサーのようにキヨトンとした表情をした犬の写真が一枚。

もう一枚はその犬が、青い目の黒犬に甘えるように寄り添っている写真だった。

そう、僕のブツチー・ブルー・・。

僕が飼っていた頃は、まだほんの子犬だつたけれど、そこには少し逞しく成長したブツチーの姿があつた。

「パパが泣いてるう・・」

何年ぶりだろうか・・・僕の頬を涙が伝い落ちていく。

昔、近所に住んでいた社長さんの家に、真っ白い血統書付きのスピツツが居た。

珍しいスピツツの純種で、パールと名付けられた彼女は大切に扱われていたのだ。

リボンやフリルで飾り立てられたその犬に、近所に住むボクら子供達は、触ることすら許されていなかつた。

そのパールが、お見合いをした相手の犬が気に入らなかつたとかで家出をしてしまう。

社長さん一家は、誘拐事件かもしけないと、お巡りさんにまで頼んで探ししまわつた。

当時は、野良犬がウロウロしていて、野犬狩りを職業にしている人も居たから、社長さんの心配は並大抵じやなかつたのだろう。

キヤンキヤンとよく鳴く犬だったので、パールの居ない2ヶ月の間、近所の住民達は「静かねえ」と密かに喜んでいた。

パールが、この辺の野良犬のボスだつたブルーに付き添われて戻つて来た時、大喜びした社長さんは、ブルーに大きな骨を投げてやつ

たそうだ。

それからしばらくして、パールは5匹の可愛い子犬を生む。5匹の内、3匹は白い子犬だったが、1匹は真っ黒い子犬で、もう1匹は白黒の斑犬・・・。

父親譲りの青い目。

子犬達の父親が、あの野良犬ブルーである事は明白だつた。当然、社長さんは怒りまくつた。

腹立ちまぎれに手に持つていた灰皿を、子犬に向かつて投げつけた。でも、その灰皿は、母親の本能で子供を守ろうとしたパールに当たつてしまふ。

パールの死で更に逆上した社長さんは、心配そうに家の周りをうろついていたブルーの事を、ゴルフのクラブで叩きのめしてしまつた。そして、白くない子犬は捨てられた。

段ボールに2匹の犬を入れて近所の川に流しに来たお手伝いさんと、ボクが出っくわしたのは偶然だつた。

テストの点が悪くて、まっすぐに家に帰る勇気が無かつたボクは、近くの河原で染物屋さんが染め流しの洗い作業をするのをぼんやり眺めていたのだ。

段ボール箱の中の斑犬と目が合つた瞬間、この犬の名前はブッチャーだと思つた。

父親の名がブルーだから、その息子という意味でブッチャー・ブルーと勝手に名付けた。

真つ黒な子犬の方は、染物屋さんに引き取られていった。

ボクの頭の中から、悪い点をとつた事なんか吹っ飛んでしまつた。胸に抱いた子犬の温もりを感じながら、何と言つて親父を説得しようかと、頭が痛くなるくらい真剣に考えながら家に帰つた事が、昨日の事のように思い出される。

その晩、生まれて初めて両親の前に正座して、手を付いて頼み事をしたのだが、テストの点の事もあって説得力には欠けていた。

「私も手伝つてあげるから。」

姉の申し出に助けられ、ブツチーは我が家の一員となる事が出来た。「キチンと世話をするんだぞ。出来なかつたら保健所行きだからな」それが、あの時の親父との約束・・・。

次の日曜日に、親父が犬小屋を造つてくれる事になつていた。

それまでは、ブツチーは玄関の段ボール箱で寝る・・・という取り決めだつたのだが、ボクは内緒で約束を破る。

だけど、ブツチーがおねしょをしたから、内緒にしておけなくなつた。

お袋にひどく叱られたけれども、ブツチーの事が心配で、次の晩から日曜日までは、玄関に布団を敷いてもらつて寝る事にした。

そういえば、2階から布団を下ろして、玄関に敷いてくれたのは親父だつたよなあ・・・。

ブツチーは、親父が造つた犬小屋が気に入つたらしく、すんなりと引っ越しをした。

朝、学校に行く前に散歩に行き、小屋の周りを掃除するのがボクの日課となつたのだ。

家族の一員になつたブツチーは、無邪氣な可愛い子犬だつたから、ブツチーが背負つていた「悲劇的な家族との別離の事」などすっかり忘れていた。

僕が少しブツチーの世話に飽きてきた頃、散歩の途中で例のお手伝いさんに会つた。

「まあ、これが、あの時の子犬？大きくなつたのね。そういう、この子のお父さん・・・北海道に居るんですつてよ」

今思つと、ブツチーは、あのやり取りを理解していた様な気がする。すごく悲しげな目をしていたから・・・。

それから3日後、ブッキーは居なくなつた。

僕は、パールが居なくなつた時の社長さんの気持ちが理解できた。ビラを配つたり、学校放送で皆に呼びかけたり、懸命にブッキーを探したけれどブッキーは見つからない。

もしかしたら、親父が・・という気持ちが頭をよぎる。

でも、ブッキーの世話をさぼるようになつていたのは自分だから、後ろめたくて聞けなかつた。

そんなモヤモヤしたモノが、魚の小骨みたいに心の奥の方に引っかかつたまま、僕は大人になつてしまつた。

どうやら手紙を書いて寄越したのは、ブルーを北海道に連れて帰つた獣医さんの娘さんらしかつた。

「亡くなつた父の遺品を整理しておりましたら、写真とメダルが出てきました。」と、書かれている。

ブッキーは、我が家を出てから1年ぐらい後に父親ブルーと再会を果していたのだ。

同封されていた写真は、その頃に撮影されたものだ。

ブッキーが、どうやって北海道まで行き着けたのかは知る由も無い。どうやつて、父親の所在を探り当てたのかも・・。

ブルーと再会した時のブッキーは、ボロボロに疲れきっていたけれど、その後、奇跡的に回復して元気に10年くらい生きたそうだ。

27年前、その獣医さんはメダルの裏の住所を頼りにボク手紙を書いたけれども、出しに行く途中で事故に遭い亡くなつたそうだ。そのせいで、連絡が遅くなつて申し訳ありませんでした・・・といふ謝罪の言葉が書き添えられていた。

僕は、もう一度写真に目をやつた。

「褒めて下さいな」とでも言いたげに、なんとも誇らしげな表情を

している。

「よくやったね。お前、どうやって北海道まで行つたんだよ。ナゴ
いよ。ブルーに・・お父さんに会えたんだね。よかつたな。
ブツチーの「ワンッ」という返事が聞こえたような気がした。」

台所に行つて冷蔵庫を開けると、缶ビールを2本取り出した。
さつきの手紙と一緒にビニール袋に入れて家を飛び出す。
子供達を連れて近くの河原に散歩に出でている親父を見つけて、久
しぶりに一人で一杯やうづと思つた。

30年前、子供だった僕と・・親父に乾杯。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2936c/>

セブテンバー・レター <伝説のブッチャー・ブルー>

2010年10月8日22時43分発行